

『奥義抄』所収「戲咲歌」存疑

日比野 浩 信

一

『奥義抄』上巻は「式」と呼ばれ、既成の歌学が集成されており、平安時代の歌学を知る上で無視することはできない。多くの歌学書の直接の引用は、その出典となった歌学書の享受を考える場合にも、有益である。

例えば、『歌経標式』は、略本が用いられていたことがわかるし、『喜撰式』などは、現存『喜撰式』以外の「偽式」が用いられており、現存『新撰和歌髓脳』がこれに当たるようであることが知られるが、これらはその引用が、信用するに足る態度で行なわれていればこそ明らかにできたということがいえるであろう。

しかし、何分にも長期に渡って書き継がれてきたもの

でもあり、その本文の全てを盲目的に信用することは危険である。

その一例として、歌学書からの引用ではないが、「戲咲歌」の項に引用されている『万葉集』歌について、卑見を述べてみたい。

二

『奥義抄』（『日本歌学大系』所収本による）には次のようにある。

十一 戲咲歌

如字。

はつをものつくりたるたをはむからすまなぶたはれてはたほこにをり

十二 無心所着歌

雜会歌体也。無所存也。

わぎもこがひたひにおふるすぐろくのことうへの
うしのくらのうへのかさ

已上出万葉集。

ここで問題としたいのは「十一 戲咲歌」の項で例歌として引用される「はつをものゝ」の歌である。この歌は「已上出万葉集」とあることから「わぎもこのゝ」の「無心所着歌」と共に『万葉集』を典拠としているとみられよう。そこで『万葉集』を見てみると、巻第十六に「高宮王詠数種物歌二首」とするうちの一首に、

波羅門乃 作有流小田乎 喫鳥 臉腫而 幡幢尔居

(三八五六)

とあり、「臉」は「臉」の誤りであろうことが「校本万葉集」にも指摘されている、西本願寺本『万葉集』での訓は、

バラモンノ ツクレルヲダヲ ハムカラス マナブ

タハレテ ハタホコニナリ

とされており、現在では、

ばらものに つくれるをだを はむからす まなぶ

たはれて はたほこにをり

と訓じられており、「校本万葉集」を参照するに、大異

ないようである。出典となっているはずの『万葉集』と比較すると、『奥義抄』所収の「戲咲歌」は第一、二句が異なっており、特に第一句は全く相違している。この異同は一体何によるものであらうか。異伝本文、改作、誤写などが考えられるであらう。

ちなみに「無心所着歌」の項にあげる「わぎもこがゝ」の歌は、同じく『万葉集』巻第十六に「無心所着歌二首」とあるうちの一首に、

吾妹児之 額尔生 双六乃 事負乃牛之 倉上之瘡

(三八三八)

とあり、西本願寺本の訓では、

ワギモコガ ヒタヒニオフル スグロクノ コトヒ

ノウシノ クラノウヘノカサ

となっており、小異はあるが『奥義抄』の引用は『万葉集』に拠っていると認められる。

三

まず、『奥義抄』の本文を吟味してみたい。「日本歌学大系」の底本である志香須賀文庫蔵本以下、管見に入った諸本では次のようにある。

志香須賀文庫蔵本(略号、志)

はつをものつくりたる田をはむからすまなけたはれて
はとほこにをり（第五句、「はたほこにせり」とも読
める）

宮内庁書陵部蔵本（略号、書）

はつをものつくりたる田をはむからすまなひたはれて
はたほこにおり

豊橋市立図書館蔵本（略号、豊）

はつをものつくりたるたをはむからすまなふたはれて
はたほこにをり

内閣文庫蔵零本（略号、内零）

は、ものつくりたるたをはむからすまなふたはれては
たほこにをり

京都女子大学蔵本（略号、京）

はからものつくりたる田をはむからすまなふさはれて
はたほこにせり

慶安四年版本（略号、版）

はつをものつくりたる田をはむからすまなふたはれて
はたほこにをり

国立歴史民俗博物館蔵本（略号、歴）

ハラモンツクリタルタラムカラスマナフタハレテ
ハタホコニウヲリ

（以上、川上氏分類のⅠ類）

大東急記念文庫蔵本（略号、東）

波羅門の作れる小田をはむからすまなふたはれてはた
ほこにおり

内閣文庫蔵抄本（略号、内抄）

はつを物つくりたる田をはむからすまなふたはれては
たほこにをり

（以上、同Ⅱ類）

また、Ⅱ類本に分類される三手文庫蔵校合本（略号、三）
は、慶安四年版本に校合を加えたものである。その校合
は、後になるに従って粗略になつていくが、上巻などは
かなり詳細な校合がなされている。該当箇所を示すと、

はつをものつくりたる田をはむからすまなふ
たはれてはたほこにをり
波羅門万葉

ここに記した校合は、（一）は墨書校合、他は朱書校合
である。校合のほとんどは朱書校合であるが、このよう
な墨書校合も若干存していたようである。その原因は明
確にはし難いが、何らかの区別があるはずである。思う
にこれは、校合に用いた本に、既に記されていた傍書、
校合の類などであろうか。「波羅門万葉」は、校合者今井
似閑が「はつをもの」を不審として『万葉集』を参照し
た際の注記とも考えられそうである。すると、墨書校合

は『万葉集』との違いを書き記したのかもしれない。推測に留めておきたい。ともあれ、ここからは、二通りの本文が得られることになる。まず、墨書校合からは、

はつをものつくりを田をはむからすまなふたはれてはたほこにをり

となり、更に朱書校合からは、

はらもんのつくりたる田をはむからすまなふたはれてはたほこにをり

が、得られるのである。

現在伝本の本文は、概ね以上のものである。第三句以下にも小異があるが、「はむからすまなふたはれてはたほこにをり」とある本文が『万葉集』とも一致しており、字形の類似などによる誤写とみてよいであろう。問題となるのは第一、二句である。結局『奥義抄』に引用される「戲咲歌」は、誤写と考えられるものを除くと、

①第一句を「はつをもの」とするもの

②第一句を「はらもんの」とするもの

③第二句を「つくりたるたを」とするもの

④第二句を「つくれるをたを」とするもの

が認められることとなり、ほとんどその組合せの違いであるということになりそうである。

該当箇所に関して原田芳起氏は、

上冊、戲咲歌の例歌、歌学大系で二三六頁、九流^①にも誤つていて、

はつをものつくりたる田をはむからすまなふたはれてはたほこにをり

とある。しかしこれが奥義抄原撰本のままであろう。それも伝承の誤を継いだものであろう。東はこれを改める、

波羅門の作れる小田をはむからすまなふたはれてはたほこにをり

こうした修正は何人が指摘して、清輔もそのままにしてはおけなかつたものであろう。また清輔自身の万葉研究が実証化に進んだ結果でもあつたろう。右は万葉卷十六、三八五六の歌である。万葉の本を讀んだ後には流九の如き訓を扱ふことはあるまい。と述べておられるが傾聴すべき見解ではあろう。

四

では、他にこれと同じ歌を引用するものにはどのようなものがあり、どのような本文がみられるのであろうか。まず、初期の『万葉集』注釈書『万葉集抄』^②がある。これには、

波羅門乃作有流小田乎喫鳥脰腫而幡幢尔居

此ハタハフレ事也 難義ニハアラス

とあり、歌の右傍に

ハラモムノツクレルヲタヲハムカラスマナフタハレ
テハタホコニヲリ

との訓を記す。また、時代は下るが上覚の『和歌色葉』にも同歌が引用される。これには、

戯咲といふ歌は、これたはぶれわらふ詞也。まことに
もうちきくにはらのわたきりたり。

ばら門のつくりたるたをはむからすまなぶたはれ
てはたほこにをり

とある。本文は「日本歌学大系」所収本により、他に静嘉堂文庫蔵本、上野本を参照した。小異はあるものの、引用歌に関しては仮名遣いの違いがほとんどで、上野本が第二句を「つくりくるたを」としているが、字型の類似による誤写であろう。平安、鎌倉期の歌学書などで同歌を引用するものは、今のところ他には触目していない。また、更に時代は下るが、『鴉鷲物語』にも、やや特殊な引用が見られる。これには、

万葉十六、

波羅門之 作多留田於 咬鳥 眸腫天 幢仁居

とあり、「新日本古典文学大系」では、

ばらものつくりたるたをはむからすまなぶたはれ
てはたほこにをり

との訓を付す。表記がすでに『万葉集』とは大きく異なっており、現存『万葉集』諸本に、これと同じ表記をするものは見当たらないようである。ただ、一、二句を読み解こうとすると、「大系」に記された訓が妥当である。「作多留田於」を「つくれるをだを」と読むのはやはり無理であろう。表記が異なるのは、仮名で表記された歌に、後から漢字表記を当てはめたために起きたのではなからうか。

他にも、近世になると、『万葉集』の注釈が国学者によってなされるようになるが、時代が大きく異なることから、ここではすべて省略する。

五

これまであげた本文を、その訓読例として列挙すると、
大体、次の五種類に分類できる。

①ばらものに つくれるをだを

(新編国歌大観など)

②ばらもの つくれるをだを

(『万葉集抄』、西本願寺本『万葉集』、東)

③ばらもんの つくりたるたを

〔和歌色葉〕、歴、三朱校合

④はつをもの つくりたるたを

〔歌学大系〕、志、版など

⑤はつをもの つくれり(る)をたを

(三墨書校合)

①は現在の研究による成果であると考え、ここでは除外してよさそうである。よって、②③④⑤の四種を、この「戯咲歌」の異伝本文であるとする。

さて、「つくれるをだを」が『万葉集』の表記から最も適当な訓ではあるが、先に触れたように、「つくりたるたを」とする本文も当時存在していたと考えられるのではなからうか。『奥義抄』中・下巻にも『万葉集』の表記に言及する箇所が多くみられるが、このことは、『万葉集』の享受が仮名表記を主としていたことを示唆するものであろう。実際、仮名表記のみの『万葉集』歌の伝播は、この『奥義抄』他、多くの歌字書が示す通りであり、漢字表記を伴っていても、厳密に考慮する必要はなく、内容を変えずに、表現が多少異なる伝播も有り得たことは想像に難くない。「研究」目的でもなければ『万葉集』の漢字表記は二義的なものであり、余り注意されることもなかったのではなからうか。第二句は『奥義抄』

のみならず、『和歌色葉』や『鴉鷲物語』などにも「つくりたるたを」とあることから、これが人口に膾炙していた「戯咲歌」の第二句であつたのではないだろうか。ただ、同じ『奥義抄』においても「つくれるをだを」とする伝本があるが、大東急本などⅡ類本は、作者清輔によつて、増補、改訂された本文であると考えられる。この第二句に関しては、原田氏の述べられた如く、初めは普通に広く膾炙している「つくりたるたを」を用いたものの、後に漢字表記より得られる訓として正しいと思われる「つくれるをだを」に改訂したと考えられよう。清輔の『万葉集』の利用については、稿を改める予定であるが、『奥義抄』に見られる『万葉集』の、特に表記に関する記述は、現存『万葉集』と比較する限りにおいては、必ずしも正確であるとは言いがたい。これも、仮名主体の『万葉集』の享受をうかがわせる要因の一つといえようが、清輔が『奥義抄』執筆当初から、厳密に『万葉集』を参照していたとは認め難いのである。そういった意味では、原田氏のいう「清輔自身の万葉研究の実証化」以前の誤りとして認められるであろう。この第二句に関していえば、「つくりたるたを」も「つくれるをだを」も、共に『奥義抄』の改訂前、改訂後の本文として認められるのではないだろうか。

七

さて、特に大きく異なる第一句について、当然検討しなくてはならない。この「戯咲歌」の大まかな解は、『万葉集』の本文では「波羅門の作った田を食い荒らした鳥が、（罰があたり）まぶたを腫らして幡の上にとまっている」という、罰当たりな鳥をまさに「戯れ笑った」歌意となるであろう。では、「はつをもの」ではどうであろうか。「新編国歌大観」によって検索するに、『奥義抄』のこの「戯咲歌」の第一句は「はつおももの」として記載されているので、「はつをもの」「はつおももの」の両方についてみるが、「はつおももの」の例が、『夫木和歌抄』巻第十の「秋部」に「初秋」として一首確認できる。

健保四年毎日一首中 民部卿為家卿

おほみ田のことしのわせのはつお物神（ミコ）の社にけふそなふなり
(三八九三)

ここにいう「はつおももの」は、「初」めて供える「御物」であろう。管見に触れた『奥義抄』現存伝本では「はつをもの」とあるが、歌意に適した「をもの」という語の存在を確認し得ない限りは、「新編国歌大観」に表記された如く、「はつおももの」とみて、「初御物」ととらえる

のが最も妥当であろう。

和歌に使われた「はつおももの」が『奥義抄』所収歌と為家歌の二例とすると、『奥義抄』の例が最も古い、歌語としての「はつをもの」の一例であるということになるのであるうか。ここから想像を広げていくならば、為家の目に触れた『奥義抄』には既に「はつをもの」とあって、これを自分の歌に詠み込んだとも考えられようが、これには何ら論拠もなく、あくまで推考にすぎない。しかし、『奥義抄』には「出万葉集」とあることから、ここに取り上げる「戯咲歌」はやはり『万葉集』を出典としていると考えざるを得ない。また、『万葉集抄』『和歌色葉』においても「はらもんの」とあったのではないだろうか。何より、Ⅰ類本を改正前、Ⅱ類本を改正後とらえた時、Ⅰ類本中にも「はらもんの」とする伝本が存在しているのである。

「はつをもの」と「はらもんの」の関係は、原形とその改正などではなく、誤写による異同であると考えべきなのではないだろうか。字形の類似、つまり「ら」を「つ」に、「も」を「を」に、「ん」を「も」に誤ったために生じた異同であると思われるのである。三手文庫本には「も」の横に「ん」と校合する箇所がいくつかある。「も」の古体として「ん」に似た文字が使われてい

たことは周知のごとくであろう。また、「も」字を「を」字に誤ったものであるからこそ、現在諸本の誤りが「はつおももの」とはなっておらず、「はつをもの」となっているのではなからうか。それが「はつおももの」と混同され、誤りと気付かれぬままに書写されていったのではないだろうか。

ただし、前述のような仮名書きの『万葉集』の享受を念頭に置いた場合、この誤写が、清輔の用いた『万葉集』に既に存した誤写であることも疑ってみなくてはなるまい。しかし、改定を施す以前の『奥義抄』、すなわちⅠ類本の中に「はらもんの」とする伝本があるのであり、やはり『奥義抄』が書写されていく過程で生じた異同であると考えてよいであろう。

『奥義抄』諸伝本のうち、第一句を「はつをもの」とするもののほとんどがⅠ類本である。Ⅰ類本の中で唯一、歴史民俗博物館本のみ「ハラモンノ」とするのは、他のⅠ類本に比べ、書写年代も古いことから、誤写の生ずる以前に、もしくは誤写されていない本を書写したのであろう。ただし、Ⅱ類本のうち、内閣抄本は、「はつをもの」としているのが、気にかかる。しかし、内閣抄本は、特に、中・下巻において、Ⅰ類本との接触があったと思われる節があるようであり、この「戯咲歌」に関し

てもⅠ類本との接触により「はつをもの」としているとは考えられないだろうか。また、三手文庫本の墨書校合によって得られた本文も、これと同様、Ⅰ類本との接触ともみられそうであり、前述の様に、校合に用いた本に既になされていた書き入れを区別したとみた場合、第二句のみに校合を必要としていたことが知られるわけであり、正しく書写されたⅠ類本が、Ⅰ類本との接触のあったⅡ類本との校合によってなされたものであったとみることができるかもしれない。混成的な本文も存したことは否定できない。

八

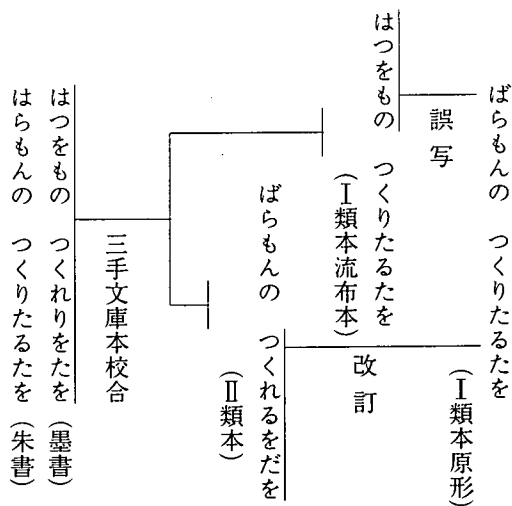
さて、本稿において証左とした『和歌色葉』について付言する必要がある。『和歌色葉』は、特に『奥義抄』の中・下巻との関連が指摘されているが、『奥義抄』上巻からの影響は当然考え得るであろう。『和歌色葉』が『奥義抄』を利用していることが明確であるならば、少なくとも『和歌色葉』が用いた『奥義抄』本文を推定する上で有効なはずである。しかし、先にあげた「戯咲歌」の例からもわかるように、説明文については、二書が必ずしも同一ではない。引用される例歌についてのみ比較し

てみても、同一の例歌の場合が多いが、異なる例歌をあげる場合もあり、説明文の内容比較等も含め、『奥義抄』上巻と『和歌色葉』の関連の詳細については、稿を改めることとする。ともあれ、「戯咲歌」の項目を持つ、主立った歌学書は、この二書の他には触目していない。また、『奥義抄』中・下巻が明らかに『和歌色葉』に引用されていることから、上巻も同様に考えてよいかもしれない。すると、『和歌色葉』の引用した『奥義抄』の「戯咲歌」は「はらもんの つくりたるたを」とあったことが確実視できるのみならず、『和歌色葉』に用いられている『奥義抄』上巻の本文はⅠ類本系統であった可能性が生じることになる。また、二書に引用関係がなかったとしても、人口に膾炙していた「戯咲歌」が「はらもんの つくりたるたを」であったと認めることができるはずである。

九

以上、述べてきたことを整理してみると、Ⅰ類本『奥義抄』には「はつをもの つくりたるたを」と「はらもんの つくりたるたを」の二種が存し、Ⅱ類本には、Ⅰ類本との接触という事を考慮すれば「はらもんの つく

れるをだを」とあったことになる。これらの異同は次の様にとらえられるだろう。



Ⅰ類本ではそもそも「はらもんの つくりたるたを」とあったものの、第一句を誤写したものが最も多く流布し、Ⅱ類本では第二句が改訂されて『万葉集』にみられる訓と同じくされたのはなからうか。

要するに、『奥義抄』上巻の「戯咲歌」の原形は、『和

歌色葉』にあるように「ばらもんの つくりたるたを」とあったのであり、それが後に第二句を『万葉集』の表記に従い「つくれるをだを」と改められたらしいのであり、第二句については両種あったことは認められる。しかし「日本歌学大系」以下、版本を含む多くの流布本系統本にあるような、第一句を「はつをもの」とするのは、清輔自身の誤りなどではなく、誤写により生じた異同であつたとみられ、一首の「戯咲歌」として認めるわけにはいかなくなるのではないだろうか。ただ、長らく、少なくとも江戸初期から『奥義抄』所収「戯咲歌」として受け入れられていたことだけは認めざるを得ない。

また、『和歌色葉』が明らかに『奥義抄』上巻に拠っているとすれば、作者上覚が用いた『奥義抄』上巻は、「はらもんの つくりたるたを」とする本文、すなわち現存伝本の内では、I類本系統の本文だつたのではなかつたかとの可能性も生じることになるであろう。

更に、誤写により生じた異同であるらしいことから、第一句を「はつをもの」とする伝本の近似性が改めて認められるのではなからうか。但し、他本との接触という厄介な問題などが残るが、すべて今後の課題としたい。

御教示、御叱正乞う次第である。

注

- (1) 久曾神昇氏「喜撰式と新撰和歌髓脳」(『文学』四巻七号、五巻六号)
- (2) 『万葉集』の引用は『新編国歌大観』により、旧国歌大観番号を用いた。
- (3) 川上新一郎氏「奥義抄伝本考」(『斯道文庫論集』二十四輯)
- (4) 「大東急本奥義抄管見」(『かがみ』八) ここで原田氏のいう「流」は慶安五年版本、「九」は「日本歌学大系」の底本である志香須賀文庫蔵本、「東」は大東急記念文庫蔵本である。
- (5) 『万葉集抄』は、冷泉家時雨亭叢書「金沢文庫本万葉集卷第十八・中世万葉学」による。
- (6) 「静嘉堂文庫所蔵歌学資料集成」のマイクロフィルムによる。
- (7) 黒田彰子氏「上野本和歌色葉」による。
- (8) このような観点からは、再考の要はあるが、斉藤茂吉の指摘が興味深い。(『源実朝』「奥義抄其他と金槐集」)
- (9) 『新編国歌大観』による。

(大学院博士後期課程三年)